宋代研究の新たな道標

鄧子勉
内山精也

また一つ、宋代研究の確かな道標が立てられた。李裕民著『宋人生卒行年考』（以下、『行年考』と略称）がそれである。本書は昌彼得・王德毅編『宋人伝記資料索引』[1]（以下、『索引』と略称）に収録された約二万名の宋人のうち、生卒年の記載のないもの、または記載はあっても誤りの含まれるものを主たる対象として、計千七百余名の生卒年を考証し補訂した労作である。書名からは論文集であるかの印象を受けるが、実際には工具書の体裁を採る。全体を五巻に分かち、姓氏の画数によって配列し、末尾に四角号碼による人名索引と字号索引が付されている。本編は、まず補訂対象の宋人が『索引』の何冊何頁に収録されているかを明示した上で、生卒年を明記する。その後に、根拠となる資料を示し考証の過程を明らかにしている。各條は、もっとも短いもので二行、もっとも長いもので二頁、強半が五行以下の簡潔明快な記述からなる。

著者の李裕民氏は現在、陝西師範大学の教授、『行年考』のほかに、『四庫提要訂誤』（中華書局、二〇〇五年、増訂版）、『宋史考論』（科学出版社、二〇〇八年）等の著書がある。また、わが国内閣文庫所蔵の天下の孤本『増広司馬温公全集』の価値をいち早く見出され、日本において影印刊行する（佐竹靖彦氏と共編。汲古書院、一九九三年）一方、中国においても、この書に収められた「日録」を中心に校注を加え、『司馬光日記校注』の書名で上梓され（中国社会科学出版社、一九九四年）、宋史研究者の注目を大いに集めたことは、記憶になお新しい。

評者（内山）の専攻は文学であり、『行年考』に採り上げられた千七百余名の、ごく一部の詩人についてしか関連の知識をもたない。その上、生卒年の考証をした経験にも乏しく、本書の真価を語るにはかなり心もとない。かくて、畏友鄧子勉氏の力を拝借して、わが身に課せられた責めを塞ぐこととした。鄧氏がもっとも得意とする分野は詞学文献に関わる研究であるが[2]、かつて三千二百名の宋人について、その排行、すなわち同一宗族の同世代における出生次序を考察した『宋人行第考録』（中華書局、二〇〇一年）という大著を世に問うており、まことに豊かな考証の実体験をもっている。よって、『行年考』の真価を量るのに、彼以上に相応しい人物は、私の周辺にはいない。

李裕民著
宋人生卒行年考

中華書局　2010年
［3528円］

以下、鄧子勉氏の書評を紙幅の許す限り紹介する。

■『行年考』の訂誤

『索引』は、我々が宋人の伝記を調べる際、真っ先に繙くべき基本的な工具書である。該書には小伝も掲げられ、生卒年も一部明記されている。しかし、『索引』の重点は、伝主に関わる現存の伝記資料名を列記し、その所在を明らかにすることにあり、生卒年の記載は最重要の項目ではない。そのせいか、西暦換算や事実誤認によるケアレス・ミスが散見される。これらのミスを『行年考』は一つ一つ指摘し、修正を加えている。

西暦換算ミスの代表例としては、北宋前期、西崑派詩人の劉筠のケースが挙げられる。『索引』では、「九七〇―一〇三〇」と記されているが、本来、「九七一―一〇三一」が正しい（三七九頁）。

事実誤認の例としては、梅妻鶴子によって名高い林逋のケースが挙げられる。『索引』はその享年を七十二とし、「九五七―一〇二八」とするが、『隆平集』や『東都事略』等、北宋史書の伝では、いずれも六十一とする。『行年考』では享年六十一歳説に従って、生年を九六八に改めている（一三三頁）。

この二例のように比較的容易に修正を加えられるものばかりではない。たとえば、北宋後期の直言の士、陳瓘（字了翁）の生卒年には、従来諸説があり、李裕民氏は『行年考』最多の字数を割き、二頁にわたって考証を展開している（二四三頁）。『行年考』は、まず『索引』の「一〇五七―一一二二」について、生年は正しいが、没年が誤っているとする。と同時に、陳宣子『陳了翁年譜』にいう「宣和二年二月」説も、張其凡『陳瓘年譜』にいう「宣和四年」説も、どちらも誤りとし、宣和三年（一一二一）説を唱える。その根拠は以下の四点である。

第一に、恵洪の「了翁の書に跋す」に、宣和二年の夏、陳瓘の書簡を得た後、ほどなく陳氏が山陽（江蘇省楚州）にて死去したこと、命日は四月九日であることが記されている。しかし、李綱の「了翁に与ふる書」によると、陳氏が宣和二年五月の時点でまだ南康軍（江西省星子）

中国発行の日本語月刊総合誌
人民中国
People's China 9月号
人民中国雑誌社　定価400円（税込）
［年間購読料4800円（税込）］
【特集・「80」後世代の結婚事情】悩める理工系の独身男性◆美しい独身生活を楽しむ◆男女比アンバランス【連載】◆ぶらり旅 東北①ハルビン―ロシア情緒たっぷりの町並み◆チャイナ・パワーを読み解くPart Ⅱ⑩FTA～チャイナ・パワーの源泉◆長江文明を訪ねて⑰金沙遺跡・古代人の宇宙観示す黄金の「太陽神鳥」◆私のしごと⑳オリジナルをめざす新世代のアニメ作家◆世界遺産めぐり⑰湖南省新寧県・中国の「丹霞」―崀山◆（ほか）
『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。
☎03（3937）0300（東方書店）
二〇一〇年一月号より『人民中国』デジタル版をFujisan.co.jpで販売しています。サンプル版の試し読み（無料）もできます。
http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385

に在ったことが知られる。よって、同年四月に死去していたはずはない。恵洪の題跋にいう「宣和二年」は、「宣和三年」の誤写ではないかと疑われる。第二に、『皇宋通鑑長編紀事本末』や李心伝の『旧聞証誤』等の記載により、陳氏が楚州に到着したのが宣和二年の年末であることが分かる。第三に、朝廷は陳氏を監査するため曽紆を楚州に派遣したが、王明清の『揮麈後録』や『宋会要輯稿』等の記載により、曽紆が楚州に着任したのは、どんなに早くとも宣和二年の年末であることが知られる。第四に、宣和三年四月の没とすると、享年が六十五となり、『宋史』本伝の記載とも符合する。――以上四つの根拠を挙げて新説を唱えている。このように本格的に考証を加えたものには、ほかにも向子諲の例があり（六二頁）、これらはいずれも高い説得力を備えている。

■『行年考』の増補

増補のパターンには主として三つがある。一つは、『続資治通鑑長編』、『建炎以来繫年要録』、『宋会要輯稿』や、行状、墓誌銘、碑記等の史料に基づき、直接生卒年を決定したもので、『索引』の遺漏を補うものである。二つ目は、関連の資料に考証を加え、総合的に生卒年を導き出すもの、そして三つ目は、推論によっておおよその生卒年を限定するものである。

第一のパターンはむろんのこと、第二、第三のパターンも、おおむね首肯できる内容であったが、書評の常として、ここであえて一二の疑義を呈することとする。

まずは、第二パターンのなかから、北宋後期の詩人・李之儀の例を採り上げる。『行年考』は、李之儀の生卒年を「一〇四八―一一一七」とする（九三頁）。生年については、李之儀の「耀州の畢九に寄す」詩に、「我より長ずること一歳にして今は皆な翁なり」の句があり、これに基づき、「耀州の畢九」、すなわち畢仲游の生年、慶暦七年（一〇四七）に一を加算し、慶暦八年（一〇四八）を李之儀の生年とした。この点は疑問の余地がない。問題は没年の方である。『行年考』では、周紫芝の「姑渓三昧の序」の記述により、没年を徽宗の政和七年（一一一七）、享年七十二としているが、王明清の『揮麈後録』巻六では、李氏が八十歳で卒した、と記している。『行年考』では、これを王氏の誤記と断定するが、李氏本人の詩文やその他の著述を参看すれば、李氏が政和七年以後もなお健在であったことは明白である。

たとえば、李之儀の「祥瑛上人字序」は、末尾に「戊戌三月六日姑渓老農書」と署されており、「戊戌」は政和八年を指す。また、李氏に「石敏若挽詞」という作品があるが、『嘉靖太平府志』巻六に、石敏若の伝があり、この伝によって石氏の死が宣和元年（一一一九）以後であることが知られる。よって、その挽詞を書いた李之儀本人も、宣和の初年には、当然なお健在であった。さらに、李氏の「雑挽詩四首」其の一に「年光八十の春」という句があることから、王明清の『揮麈後録』にいう八十歳で卒した、という記述は、十分信頼に足るものであると見なされる。よって筆者（鄧子勉）

は、李之儀の没年を欽宗の靖康二年、すなわち高宗の建炎元年（一一二七）とすべきである、と考える。周紫芝の「姑溪三昧の序」には、周氏が政和四年（一一一四）七月、姑熟（安徽省当塗）にて初めて李之儀に会い、「後三年にして公亡ぶ」と記されているが、この「三年」は「十三年」の「十」を脱字した、伝写の誤りではないかと思われる。もしここが「十三年」ならば、「年光八十の春」とも、王明清の記述とも、ぴったり符合するからである。

第三パターンの考証のなかからも、一つだけ誤りを指摘しておきたい。北宋後期の詩人・司馬櫆の例である（四七頁）。『行年考』では、『春渚紀聞』巻七と『嬾真子』巻一の記事を根拠とし、併せて『宋史』等を参照しつつ、司馬櫆の生卒年を「約一〇五八―一〇九五」と推定している。李裕民氏は、『春渚紀聞』の、司馬櫆が銭塘（浙江省杭州）の幕官であった時、「秦少游　銭塘尉と為り、……年を逾えずして才仲（司馬櫆の字）　疾を得て卒す」という記事を引用し、「秦少游」、すなわち秦観の杭州在任期を『宋史』本伝と『宋会要輯稿』から割り出して、それによって司馬櫆の没年を推定する方法を採っている。しかし、筆者が『春渚紀聞』を閲してみたところ、「銭塘尉と為」ったのは、「秦少游」ではなく、「秦少章」と記されていた。「秦少章」とは、秦観の弟秦覿のことである。『春渚紀聞』と同じ内容の記事が、陶宗儀の『輟耕録』巻一七や田汝成の『西湖遊覧志余』巻一六にも収められているが、いずれも「秦少章」と記されており、異同はない。

また、『行年考』では、秦観の杭州赴任を哲宗の紹聖元年のこととしたうえで、杭州滞在の時間が長くはなかったことを指摘している。だが、紹聖元年の人事異動は、新法政権による旧法党人に対する大規模な粛清人事であり、旧法党に連なる秦観も杭州通判の辞令が下ってほどなく、監処州（浙江省麗水）酒税に左降されており、滞在時間が短いどころか、杭州通判に着任した形跡すらないのが実情である。また、杭州通判を「銭塘尉」と称することも、当時の常識としては考えにくい。よって、司馬櫆の没年を秦観の杭州赴任にからめて推定しようとしたこの条は、誤りの上に誤りを重ねた考証といわざるを得ない。徐培均『秦少游年譜長編』（中華書局、二〇〇二年）によれば、秦観は元祐七年（一〇九二）二月、弟の覿が「仁和主簿」に赴任するのを都開封にあって送別している（下冊四六四頁）。「仁和」と「銭塘」、「主簿」と「県尉」というように、小さからぬ異同は存在するが、仁和と銭塘はいずれも杭州の属県であり、主簿と県尉は官位がほぼ同等であるので、『春渚紀聞』の件の記事も、元祐七年における秦覿の「仁和主簿」着任を指している可能性が大きい。そうすると、司馬櫆の没年も自ずと数年早まることになるであろう。

＊　＊

『行年考』は、千七百余もの宋人を対象として、李裕民氏がたった一人でその生卒年を考証された書であるから、幾らかの誤謬や粗略が含まれることは免れがたい。しかし、たとえ誤りが含まれていたとしても、全体からすれば九牛の一毛

にすぎず、我々が本書から受ける甚大なる恩恵と比べれば、それはまことに微々たる瑕にほかならない。そうはいうものの、欲深い評者（内山）は、李裕民氏を始め考証に長じた中国宋代の学者に対し、さらなる期待と切なる願いを心秘かに寄せてもいる。

『行年考』は、冒頭にも記したとおり、前世紀七十年代の成果『索引』を基礎としている。その後、大陸において『索引』を補訂する宋人の伝記資料索引が三種出版されている。[3] これらはいずれも地方志を主たる情報源としたものだが、そのほかに族譜や家譜の大型目録ならびに索引も刊行されている。もし、これら『索引』後の成果をもっと効果的に活用できていたならば、『行年考』の対象範囲はもっと拡がり、精度もいっそう高まったのではないか、と想像される。

文学の方面では、曽棗荘氏等による『中国文学家大辞典　宋代巻』（中華書局、二〇〇四年）が出版され、二千五百名におよぶ宋代文人の情報がきわめて利用しやすい形ですでに整理されている。そのほか、傅璇琮・龔延明氏等によって、両宋四万名余に上る科挙及第者の記録『宋登科記考』二大冊も編纂刊行された（江蘇教育出版社、二〇〇九年）。そして、畏友鄧子勉氏の『宋人行第考録』があり、このたび李裕民氏の『宋人生卒行年考』も新たにこの列に加わった。ならばいっそ、これら新しい成果すべてを取り込んだ、より包括的でより完全に近い宋人の人名辞典、ないしは伝記資料索引の決定版を作ることができないものだろうか……。こういう強欲な願いがすぐに頭をもたげてくる。もちろん、それが身の程知らずの望蜀の嘆だということも、重々承知しているつもりだけれど……。

【注】

（1）初版は一九七四～七六年の刊、七七年に増訂版が出された。出版社はいずれも台北・鼎文書局。一九八八年に北京・中華書局より増補版が影印出版されている。

（2）『宋金元詞話全編』三冊（鳳凰出版社、二〇〇八年）、『宋金元詞籍文献研究』（上海古籍出版社、二〇〇九年）等の近著がある。

（3）李国玲『宋人伝記資料索引補編』三冊（四川大学出版社、一九九四年）、沈治宏・王蓉貴『中国地方志宋代人物資料索引』四冊（四川辞書出版社、一九九七年）、同続編四冊（四川辞書出版社、二〇〇二年）。

（とう・しべん　江蘇教育学院／うちやま・せいや　早稲田大学）

■中国語話者のための日本語教育研究会
第20回研究会

▼10月7日㈮18時半～21時半▼米子コンベンションセンター（Big Ship）第6会議室（鳥取県米子市末広町二九四　JR米子駅から徒歩5分）▼申込不要・無料

【プログラムより】

中国語話者の「も」の習得に関する検証調査――「も」の文型に注目して（中俣尚己）／日本語と中国語の根拠性（エビデンシャリティ）について――「らしい」「ようだ」「そうだ」と「好象」を中心に（中畠孝幸）／中国語を母語とする日本語学習者が取る動詞の格助詞（岡田美穂）

▼司会：杉村泰（名古屋大学）▼お問合せ：第21回研究会担当委員・杉村泰 sugimura@lang.nagoya-u.ac.jp／事務局：庵功雄 isaoiori@courante.plala.or.jp